シドニー日本人学校における教科横断型授業の実践

前シドニー日本人国際学校教諭
山形県鶴岡市立第三中学校教諭　富山　航平

キーワード：在外教育施設、シドニー、教科横断型、合科、カリキュラムマネジメント、国語

シドニー日本人国際学校
Sydney Japanese International School
URL：https://www.sjis.nsw.edu.au/ja/

１．はじめに

シドニー日本人国際学校は、国際学級と日本人学級が併設された稀有な学校である。国際学級では州のカリキュラムに対応して国語（リーデイングやライティング）の授業を行っている。その単元構成は、日本の教育とは大きく異なる。オーストラリアの教育における独自性には、国語科教育をさらに活性化させるヒントやアイディアがあると考え、調査を行ってきた。すると、オーストラリアの単元構成は教科横断的な合科授業に近いことがわかり、派遣期間中に何回か実践を行ってきた。ここに何点か、報告していきたい。

２．実践報告

（１）中学部：JTB(旅行会社 Japan Travel Bureau)の社員になったつもりで、修学旅行生のためにモデルプランを作成しよう（国語総合）

〈概要〉

もともとシドニー日本人国際学校には総合の学習の時間として School Excursion（校外学習）があり、その活動と国語の授業を合わせて展開した。本単元の特徴は、生徒の作成したプランを実際にまわることができる点である。もちろん全員分のプランをまわるのは難しいため、「もし JTB 社員が現職教諭に修学旅行先を提案するなら」という場面設定でコンペティションを行った。最も獲得数の多いプランを実際の遠足時に回り、事後学習として全員でそのプランの加筆修正を行った。コンペティションのスピーチを「話す」の評価に、事後学習で作成したプランを「書く」の評価にそれぞれ入れた。

〈活動の流れ〉

①企画立案・資料作成　→②コンペティション→③遠足当日→④企画書レポート作成

〈成果〉

〇想像力や発想力を駆使し、生徒たちが楽しそうにプランを練っていたこと。

〇遠足で実際に回り、気付いたことや感じたことが事後学習に反映されていたこと。

〈課題〉

●コンペティション優勝者（プラン提案者）にとっては特に有意義な学習になるが、それ以外の生徒の事後学習におけるモチベーション維持が難しかった。

●生徒の生活経験がプラン作りに大きく影響するのが想定外だったこと。

●金額設定（移動費と食費込みで＄40）が少額だったために、どうしてもこじんまりとしたプランしか作れなかったこと。

●ターゲットの設定が甘く、後付けで授業を進めてしまったこと。もうすこし練るべきだった。

（2）Y9：世界を変えろ！　起業家　○○（国語　社会　英語）

〈概要〉

社会科の授業の総まとめとして企画した（Y9 の社会科を担当していたため）。国語と英語の合科授業として扱い、社会に貢献できる会社を真剣に考えさせた。クラウドファンディングのためにスポンサーに企画を提案するという設定のもと、日英両語でのプレゼンテーションを行うことを目標に作業を進めた。

〈活動の流れ〉

①アイディアを練る→②発表資料/事業計画書の作成→③発表練習（授業はここまで）

〈成果〉

○将来的にはこういったモデルの授業も主流になるかもしれないと感じたこと。

○教師側も経済やクラウドファンディングの知識が必要になり、しっかり勉強できたこと。

〈課題〉

●受験の時期と重なり結局発表まで至らなかったこと。スケジューリングが難しい。

●教師側の予備知識や経験が非常に大切であること。

（かなり勉強しないとできない）

●大人数を相手にした授業ではないこと（大学のゼミに近い）。

３．終わりに

「自ら考え、計画し、実行することで自主性・企画力・想像力を養う」という目標のもと合科教育的な学習を実践してきた。その目標はおおむね達成できたように思う。しかし、実際に行いながら多くの問題点も散見された。

以下に、何点か挙げたい。

●「どの部分をどう評価すべきか」、授業者なりの評価基準は設けていたものの、曖昧さが残ること。

●生徒がやり切った達成感を味わうことができる一方で、どんな力が身についたのか生徒が理解しにくかったこと。教師側が何をさせたいか、どんなことを学んでほしいのかを明確にする必要がある。当然、生徒自身がたくさん考える機会を増やすことはできたが、その活動による成長を可視化することができないのが歯がゆく、本当に力がついたのか生徒自身がそれをどう認識できるのか最後まで改善策が思いつかなかった。

●時間の捻出が難しく、人数にも縛りがあること。8人以上になると教師の手が回らない。

●授業というより自習の時間が多くなり、少しだけ不安になること。

●教師の支援で誘導しないようにするため、「待ち」の時間が多いこと。

このように、現時点において同様のことが帰国後できるかと言えば、厳しい予想になると言わざるを得ない。「日本で同様に」と考えたとき、他教科の先生とスケジュールをやりくりしながら進めるのは非常に難しいだろう。

現時点では、日本のカリキュラムに従いつつ、その中で自由に使える時間を確保し、年に1回から2回ほどダイナミックな単元構成を展開していくのが現状に即した案と言えそうである。

だが、これまで行ってきた授業でどれにも共通していたのは、生徒のモチベーションの高さである。どの活動においても、生徒たちは一生懸命考えていたし、笑顔にあふれていた。「その単元を

楽しいと思えているか」が、学習には非常に重要だということを再確認させられたように思う。

　これまで国語科として授業に携わり、「国語は技能教科に似ている」とつくづく実感している。技能教科と同様に、アウトプットする絶対的な回数がないと、生徒が伸びないからだ。訓練に近いと言ってもよい。だからこそ、これからも社会や実生活に即したアウトプットの活動を取り入れていきたい。そして、社会で必要な力と、公教育で育てようとしている力の乖離を、微力ながら取り払っていければと思う。